

整備しつつある。

6-2 国内の厩猿信仰の記録とニホンザル古分布域との相関関係

中村民彦 (NPO 法人ニホンザル・フィールド・ステーション)

対応者：川本芳

厩猿とは既に猿の頭骨や手骨を祀り、牛馬や家族の繁殖と生産などを祈願した民間信仰である。当風俗習慣は日本全土に流布していたが保存形態や口碑の全容は十分に解明されていない。今年度は調査地をひろげて情報収集をした。厩猿数は北海道 0, 青森県 3, 秋田県 13, 岩手県 31, 宮城県 6, 山形県 0, 福島県 1, 東京都 1, 長野県 3, 富山県 2, 岐阜県 1, 奈良県 1, 岡山県 6, 熊本県 4, 大分県 1, の累計数 73 である。保存形態の内訳は頭骨 62, 手骨 11 で、頭骨の性別はオス 37, メス 25 であった。年齢は 5 歳以下 6, 6 歳～10 歳 27, 10 歳以上 40 であった。東北、関東、北陸、東海、近畿、中国地方での頭骨の保存形態や口碑には類似した点が多く、頭骨には「守護神」「縁起物」「安産」「薬用」など、手骨には「豊作」「安産」などがある。しかし、九州地方における既に手骨を釘で打って取り付ける保存形態や口碑の「魔よけ」は他県との相違点であった。捕獲方法は不明瞭であったが、「鉄砲」・「トラバサミ」・「サル突きヤリ」なども散見した。北東北地方(青森、秋田、岩手)には、明治 10 年ほどまで全域にニホンザルが生息していたことが推量されているが、現在は下北、津軽、白神、五葉山地域個体群の局地的生息を確認するにすぎない。しかも、この地方からは多くの厩猿も発見された。ほかにも食用、薬用などに捕獲された事象や口承も少なくない。厩猿のための乱獲が個体数を減少させた大きな要因と推測している。

6-3 屋久島ニホンザルの保全と遺伝的多様性の研究

早石周平 (琉球大・大学教育センター)

対応者：川本芳

本研究課題は、これまでの共同利用研究により解明してきた屋久島に生息する野生ニホンザルの遺伝的多型の地理的分布情報を、地域個体群の保全に応用することを主目的とした。屋久島では、年間約 500 頭の野生ニホンザルが農作物被害の対策として捕獲されている。捕獲が地域個体群に与える影響を推定するために、屋久島町役場の捕獲実績資料から行政区ごとの捕獲統計を得た。

先行研究から島内のサル分布密度を推算し、流域ご

とに異なる捕獲状況を反映させた予備的な個体群存続可能性分析を行った。また、高標高部で採取した糞由来試料と、捕獲個体の組織片から遺伝子分析試料を調製し、遺伝的な性判定と、遺伝的多型を解析した。

この結果、個体群全体では存続可能性は保持されるが、捕獲頭数が少ないにも関わらず、島の東部と南部で、局所的な分布消失が早期に起こりうることが推測された。

遺伝的多型については、ミトコンドリア DNA の D-loop 領域の第 2 可変域の分析により 6 ハプロタイプを検出していたが、今年度は第 1 可変域の分析を行った。その結果、第 1 可変域に 4 ハプロタイプが検出され、第 2 可変域とあわせると、少なくとも 8 ハプロタイプを屋久島個体群が持つことがわかった。また、Y 染色体マイクロサテライトには 5 つのハプロタイプが検出された。

これらの遺伝的多型の地理的分布から、メスとオスのそれぞれの地理的交流を解明し、流域単位の保全に応用する方法を検討したい。

6-4 静岡県愛鷹地域に生息するニホンザルの遺伝的多様性・地域分化及び保全

大橋正孝 (静岡県森林・林業研究センター)

対応者：川本芳

現在地理的に孤立している静岡県愛鷹地域のニホンザルについて、遺伝的モニタリング手法を用いて周辺地域からの分化、孤立状況を定量化することを目的に初年度である本年度は、有害捕獲などにより得られたニホンザル 15 個体 (うち愛鷹地域 9 個体) から採取した血液及び肉片からミトコンドリア DNA の D ループ第 2 可変領域 412 塩基対の配列を調べた。その結果、[静岡・清水]、[富士・沼津]、[裾野] の 3 つのハプロタイプに区分され、いずれのタイプもこれまで全国で確認されている 53 のハプロタイプとは異なるタイプであることが分かった。

また、同じ試料を用いて第 1 可変領域 512 塩基対の配列についても調べて比較したところ、第 2 可変領域での区分よりもさらに細かく [静岡]、[清水]、[富士]、[富士み・沼津]、[裾野] 5 つのハプロタイプに区分された。

今後は、近隣地域で群れを代表するタイプを持つと考えられるメスやコドモの試料を集め、ミトコンドリア DNA ハプロタイプの分布を解明するとともに各個体群の遺伝的多様性についても明らかにしていくことを計画している。